

迷霧

司修



迷霧

司修

講談社

司
修

幽子・愛

ガンジス河のほとりで、冬の日本海寺泊港で深まる愛。
死の影におびえながら、一瞬の悦楽に酔う。独特の才筆
で恋のゆくえを描く傑作恋愛小説。

講談社版*定価一四〇〇円

長篇小說

迷霧

装
幀
公
司
修

I

夜明け方、路傍に山積みしてある段ボール箱を抜き出して、組み立て直し、その中に潜って寝るのは、泥酔した僕の得意の技だった。箱の中で眠れば、真冬でも凍えることはなかった。夏は夏で段ボール箱は快適な居住空間となる。それが証拠にストリートマンが必ず持っていて、昼は折り畳んだままベッド代わりに眠っているではないか。

箱の中で酔いが醒めると、幻想的な灰色の雲の中にいるようで、ちょうどいい寒さに刺激され、箱からのそのそと這い出して、僕は二十四時間営業の牛丼屋に駆け込むのだった。

「ビールはまだかあ」と歌う中島みゆきのファンになったのも当然といえば当然。ポケットの中の小銭を掻き集めてビールを注文。隣の浮浪者にも飲んでもらって、ごきげんとりして、こんな凍みる時に仕事に行くのはいやなものですね、なんていいながらビールをすする。ネクタイをしたサラリーマンも、ふーふーしながら牛丼を食べていると、こちとらとちつとも変わらねえじゃねえか、などとぶつぶついつて慰めてみたりする。

なんでもかんでも当たり前散らしたい気持ちに僕を支配していて、そんな態度をする人間は嫌いだと普段思っていることが馬鹿みたいに感じる。金も底をついているのに、ビールはまだかあと大声上げ、僕は浮浪者の喝采を浴びて外に出たのだった。その何ともいえぬあわれな姿。馬鹿の見本が歩いている。

朝の八時。

酔いもいくぶん覚めて、自己嫌悪が芽を出しはじめた。横断歩道を渡ろうとすると、僕を押し止めるかっこうに、都バスが歩道マークをまたいで止まった。バスの窓から、薄化粧したOLが僕をさげすむように見続けていて、青信号で進むバスに感謝している様子。僕は横断歩道を堂々と渡っているつもりが、よれよれになっていて、渡り切った電柱に抱きついて、すいませんすいませんといっている。次にはぐつと気持ちを引き締めて、時代遅れだ時代遅れだと自分にいい聞かせる。いっていることの意味が何なのかまったく分かっていない。分かっていれば酔っぱらいをやらない方がいいに決まっている。

僕は、やっとたどり着いたマンションの塵集積所ごみに潜んで、プラスチックの大バケツの間に挟まって眠る。昼頃になって部屋に戻ると、女主笑子おんななわらこには、馬鹿ねえといわれるけれど、それ以上のことはいわれない。

僕が帰る場所を失ってしまったのは、いまが今までではない。ずっとアルコールでごまかしてきたけれど、少年時代から「自分の居場所紛失者」だった。永遠の長距離走者は帰る所が

ない。酔っぱらうとそんなことをいつている。だから甘ったれた、と僕の友人はいう。

そういうば、眠って起きて重度の宿酔ふつかいに襲おそわれると、とりとめもない不安にさいなまれる。本格的な自己嫌悪が立ち上がるときの序奏だ。精神に答こたえが加えられる。僕は苦しむ。苦しんでいるうちに、これでいいんだ、これでいいんだと自分を慰めはじめ。そうやってなだめすかして夕暮れを待ち、死んでもいいような気分を一掃して描きかけの絵の前に坐る。描きたい主題が浮かんでこないの、昔のモチーフをただ描いている。絵具の使い方が上手になるだけの、練習にすぎない。それでも、描いた、芸術をやったという喜びを持てるのだから不思議だ。僕は、絵描きになってよかったとしみじみ思う。だから、新しい主題に向けて冒険の旅に出なくても、安心していられる。そういうことが悪いと分かっている。でも、絵具の臭いにはだされて、テレビンの臭いに酔よわされて、町を徘徊する力を得るのだった。まともな勉強家の絵描きほど愚劣な世界に落ちている。「そういうのがいやなんだ」元氣なことを口走ると、友はそれが甘ったれたんだという。

たしかに僕は甘ったれている。自分の生きる力の弱さをごまかしてアルコールに酔い、幻想の力がさずかると、街全体が獄壁のように思えてきて、鎧をつけ、槍を持って幻想の馬に乗り、壁へと突進する。乗り越えなければならぬ！ それだけならまだいい。獄壁の幻影は酔いが覚めても続き、自由を奪われてしまったことに悩まされ続けている。実はそのような幻想から抜け出さなければならぬのだが。

ユタに会ったその夜も、夕方から転々と飲み歩き、あちこちで友情を深め、友情を壊して、寒さで目が覚めると、お富という店の椅子で寝ていた。酔っぱらいは、決まって寒さで目覚める。

「婆^ばあさん酒、熱爛」と呟くようにいう。

「もうやめときなさい。出したって飲まないんだから」と声が返ってくる。

作りつけの木の椅子の上にござが敷いてある。僕はそこで眠っていた。

新宿区役所そばの路地にあるお富は、七十八になる婆あちゃんが、戦後すぐに屋台を始め以来、ずっと続けている飲み屋で、「お富うどん」がメインの料理。塩味で唐辛子のきいた辛いうどんというだけで、美味いわけでもなんでもない。

客は戦後から世代代わりしたものの、どさくさを生き抜いた人たちの性格は持ち合わせている。娼婦や、男娼、世の中のはみ出し者、家族にも追い出された者。時には文学者も、演劇人も来る。文字で書くと偉そうな人はみ出し者に変わりはない。

「澁澤龍彦読んだあ、凄いわよあの人の本。すてきだわ、ほれほれしちゃう。ねえ、読んでみなさいよ。ぜったい損はしないわよ」

僕の耳に、カウンターで飲んでいる二人の男の声が聞こえて来る。いつも夜明け近くにやってくる男娼とその恋人の男だ。

僕は、澁澤が紹介する異端の美術家たちを憧憬していた。美術の専門書には見られない絵画や彫刻は、芸術の裏側をかいま見る感じだった。

「あたしだめなの、漫画に毒されちゃったのよ。字がたくさんつまっているのを見ると、それだけで胃が痛くなるのよ。分かるでしょ」

「私たちの性書だわよ。ぞくぞくくるわ」

「芝居なら寺山のを見たわ。ちよつとグロだけど、私なんかに伝わってくるものがあるわ。私だってよく見ればグロですものね」

「よく見なくてもグロだわよ」

「やめて、軽蔑するのは」

「あら、ほめたのよ」

「ごまかされないわよ」

「ちよつとおかあさん、ビールないわよ」

「あんたたち、まだお客取れる時間だよ。こんなところで喋っていたって一銭にもならないよ」

「いいのよ、今日は恋人ごっこなんですもの。ねえビールちょうだい」

「ほしけりゃ、冷蔵庫から出したらどうね」

「おかあさん、この間のマージャン負けたので頭にきてるのね」

「お前にだまされて五万円もとられて大損だ」

「あら、溜めてる人にしかできないことよ、お富うどんおごるから食べてちょうだい。ビールとうどん代とここに置きますからね。」

ねえ、澁澤龍彦読んでごらんさいよ。『毒薬の手帖』とか、『黒魔術の手帖』なんてびりくるわよ。澁澤を読んでいれば、朝がきたって少しも怖くならないんだから」

「私、朝の日が昇る前後がいやなの。昇りきってしまえば、私はもう深く眠っている最中だからいいんだけど、朝はいやね」

「そうよ、いやなものよ」

「ビール飲みましょ」

「いただくわ」

ガラガラ声で、ねちっこい喋り方は、この世のものとは思えない。くだらない話は切れ目なく続いている。声で体を触れあっているような、粘液のついた触角が動いている様を僕は感じる。カウンターで初老の男と飲んでいる娼婦は仕事を終らせてきたのだろう。男も娼婦も黙ってコップ酒を飲んでいる。ヒデちゃんというヌード写真の女が飲んでいる。スタジオのように照明がある部屋で、スカートをめくって見せ、これがなになにと説明して、割増を出せばインスタントカメラでの撮影が許される。ヒデちゃんは僕を上げてくれない。不思議なことに仲のいい人には体を見せたくないと恥かしそうにいう。僕は別の店に上がって、

ヒデちゃんと同じ仕事を見せてもらった。彼女は酔うと泣き上戸になって、婆あちゃんに身の上話を始める。三度に一度くらいは僕も相槌打って聞いている。客から聞いた話が混じってしまふのか、つじつまの合わないこともあるが、女と男の別れ話は身につまされる。夏姿のヒデちゃんを見ると、腕などは僕の股ほどもあつてむちむちしているが、あそこだけ見せるより、ヒデちゃんは舞台上に立つて、身の上話でもしたら受けるだらうと僕は思っている。

「あんた奥さんいないの」

「……………」

娼婦は、新子ちゃんといわれている四十がらみの女で、赤線、青線を渡り歩いてきた強者だと婆あちゃんから聞いている。十代から体売り繋いできたということだ。彼女と寝てきたらしい男の客は、路地を見つめたままコップ酒を口から離さない。男の目は虚ろな心を映して、とてつもなく遠い場所を見ている。そんな顔を見ていると僕もあんな目をしているのだらうと思う。眼の前は荒野だが、遠くには花咲く草原が、蜃気楼となって見えている、きつとそんなところだ。

「帰らなくてもよかったんだったら、泊まりにすればよかったのに」

「……………」

「陰気だねえあんた……」

「女を抱くとそうなっちまうんだ」

男の絶望感漂う声は明日なんてない。

「それなら抱かなければいいのに」

「君に会いたくなるんだ」

「いいこというね。あんた二度目でしょ、あたしとは」

「……そうかもしれない」

「あたしのあれが いいのね」

「ああ」

「すなおでいいわあんた。朝飯食べてから別れましょうね」

「……………」

「おばちゃん、ご飯はないの。味噌汁にお新香とか」

「ないよ。うどんにしな、うどんに」

婆あちゃんは、新子ちゃんのいうことに耳を貸さず、パイプに差した「しんせい」の煙を細く長く吹き出していた。

カウンターの奥にいる男は、眠りから醒めるとお富の婆あちゃんに、逃げてしまった女房の悪口をいい、またしばらくするとカウンターに頭を沈めて眠りだす。娼婦の後ろの椅子で、眠っている男がもう一人いる。浮浪者かもしれないのだが、いつも犬の餌をやるのを忘れたといって悔やんでいる。飢えている犬のことを心配することで男は安心するのだろう。

僕がお富に来るたびにいる男だ。この店の客たちは、舞台ならさしずめ出っぱなしの役者で、馬の足か、木の幹か、庭石といったところ。

『ゴドーを待ちながら』という芝居があったけど、お富はあの舞台に似ている。違うところは、誰かがやってくるのを待っているのではなく、朝が来るのを待っているだけ。それでいながら、待っている朝を嫌っているふうでもある。漫画にある、椰子の木一本しかない小島で、水平線を眺め続けている男、そんな感じが合っている。

「あら、猫売りがきたわよ。まにあってますよ」

「可愛いお嬢ちゃん。似合うわよ黒猫が」

「縫いぐるみじゃないんですよ。ここは犬猫出入り禁止地区なのよ」

男娼たちが嬌声を上げた。

お富に入ってきたのは、スナックバー「カノン」で何度か見かけているハーフっぽい顔の女だった。小柄のせいかな少女っぽく、深夜の新宿をうろついているなんて気が知れない。彼女は黒猫を左腕で抱え、右手に僕の本綿のジャンパーを持っていた。女は僕の目と合うと、顔を崩してジャンパーを差し上げ、

「カノンの明子^{あきこ}さんがここだろうって、預かってきました。明子さんがいい店だからっていつてましたが、ほんとね」といった。

お富の薄汚れたニス塗りのベニヤの壁、ガスの臭い、娼婦、ホモ、浮浪者、よれよれ男ら

の集まりのどこがいいのだ。

僕はジャンパーを受け取り、彼女に一応の礼儀で坐らないかと隣に誘った。彼女はためらうことなく僕の隣に坐り、「今晚は」といった。

「明子さんが後で来るといっていました。大鳥さん、酔っていたから行ってあげてっていわれたものですから」

「ふーん」

「後でK画廊の吉沢さんも一緒に来るようです」

吉沢は、僕に負けず劣らずの泥酔男で、最後にはどこかで会う男だった。いやなやつだが、泥酔仲間だった。

「ありがとう、何か飲む？」

「……じゃ、一杯だけ」

「婆あちゃんビール」

「ああ、私、焼酎しょうちゅうのお湯割りにしていいでしょうか」

「結構ですよ、俺もそれをもらおう」

僕はおどけていった。

「あ、これも落としてあったらしいです。万年筆」

「いやどうもこれロットリングっての。酔っていたんだな、倒れたのかもしれない。カノン

に誰かいた？」

「吉沢さん以外は知らない人ばかり。流しが入って騒いでました」

僕は、お富に来る前に、どこの店にいたのか記憶になかった。やはりカノンだったのかと、どうでもいいことながらつぶやいた。重い頭に、三軒目くらいまでの店が浮かび、そこからすうっとカノンに飛んだ。近頃、深酔いすると記憶喪失がひどくなる。

「カノンで何回か会ったことがあるね」

「私は、大島さん知ってます。椿近代画廊で個展を見ました。エルサレムの全景が描かれていたの、私あれ好きでした」

「あんなのつまらない絵だ。何ていう名前？」

「ユタと呼んでください」

「ユタか、変な名前だな」

「本当は豊ゆたかっていうんですけど、男の名前でしょ、それでユタにしているんです。それに、私の生まれた加計呂麻島かけろまじまでは、ユタという巫女のような占師がいるんです。それにもあやかってるんです」

（そうか）

僕は、カノンで初めてユタを見たとき、何となく惹かれた理由が分かったような気がした。野性的な南の島のイメージが彼女に感じられた。

「加計呂麻島ってどこにあるっけ」

「奄美大島の一つの島です。知りませんか？　大島さんの展覧会を拝見したのも、看板でオシマというのを見て引かれてのことでした。ごめんなさい、半端な気持ちで見せてもらって」

「そういうのがいいんだ。でたらめに見てもらうのがいいんだ」

天の邪鬼のいい方をするのは僕の根性が捻くれているからで、少年のころからのものだ。その順序を踏まないと僕は先に進めない。段ボール男、泥酔男のわりには純情なのだ。ユタの声はよく通り、情熱的なか悲しみに耐えているのか判断しかねる響きがあった。

「ユンタというと、お喋りという意味があるんです。ユタめくというと、揺れるという意味になるんですけど、どちらもユタという巫女の動作に繋がっているんです。私もお喋りですよ。ユタって気がふれた人になるんです」

ユタの頬は紅潮していて、柿の皮を張ったようだ。

「こんなに遅くまでうろついているのは、ふれている証拠だよ。俺はユタさんにユタめきたいですね」

女の気を引きたい思いで僕は酔いにまかせたユタを飛ばした。酔っぱらいはスケベ根性まる出しになる。

「ユタめくって別世界に入る、という意味なんですけど」